梁の上に家護るジボイアがみしみしと鼠を喰らふ河の暁　松岡秀明

歌中のここはブラジル。日本とは全くことなる風土をうたう旅の歌である。いま、そこの梁に蛇がいる臨場感。「しみじみと」のユーモアがうれしい。四句切れで読むのだろう。河の中あるいは河のほとりに建つ家なのだろうがイメージが描きにくい。表現に工夫がほしかった。

手になじむ片口と猪口と佳き酒のあれば夜長も楽しかりけり　和田敏典

一連中の「清冽の極みなるかな若鮎を塩焼きにして食うひとときは」ともども、私と嗜好の合う酒飲みの作らしい。いい酒は燗をしたり冷やしたりせずに、常温で飲むのがいい。常温で飲むには徳利よりも片口がいい。鮎も、落ち鮎ではなく、若鮎、稚鮎がいい。ぜひ一緒に飲みたいと思う。

出でて入りまた出る度に菜の花の香立たせるニホンミツバチ　原田治子

上句の小刻みにたたみかけるような言葉の並べ方が、小柄なニホンミツバチの動きを連想させて楽しい。むかし熊野に行ったとき、日本蜜蜂を飼っている人の家を訪ねたことがあった。小柄で穏やかな蜂で、私も素手に何十匹もとまらせた記憶がある。

月明にほんのり淡き梅いちりんほどの生なり　金魚が死んだ　土門暢子

「月明にほんのり淡き」までが「梅」を起こす序詞になっている。そして、梅の花と死んでしまった金魚の命がアレゴリーになっている。一連には「寝台用エレベーターに夜半ひとり人間所詮ひとりと思いつ」をはじめ、生命のはかなさをうたう佳作があって注目した。

漆黒の天に真っ黄色の月浮かぶモダンアートな旅しめくくる　宇都宮とよ

「モダンアート」という語は、かなり広い意味で使われる用語だから、ここでも、現代的なとか超現実的なとか、読者がそれぞれの読み方で読んでいいだろう。「モダンアートな」が「月」にかからず「旅」にかかる表現的な工夫がポイント。私はミロの絵の不思議なかたちの黄色の月を思い浮かべた。

不確かな明日への疑ひなきがごと夕陽あかるき建設現場　高山邦男

大きなビルの建設現場だろう。整然と着々と手はず通りに建ちつつある空気が読めるような、そんな工事現場の夕景。確かな未来、予定通り、といった観念への疑問をうたって、的確。

河川敷さあお座りと呼ぶやうに春陽たたへて大き石あり　松田英美

春の歌として、おっとりとした感じ、ゆったりとした感じがとてもいい。つい座りたくなってしまうような自然石が照らされている。ただ、欲をいえば、初句切れのかたちが気になる。

山芋に大根、蓮根擦る夜は強く根を張る力感じて

短歌の現在

No.387　今月の15首を読む

佐佐木幸綱